

# 近代ドイツにおけるマルティン・ルターのイメージ

落合桃子



図1 シャドウ《マルティン・ルター博士記念碑》  
1821年、ブロンズ、ヴィッテンベルク

はじめに

十九世紀のドイツでは、書物の挿絵や油彩画、記念碑など、様々な媒体においてマルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)が造形化されており、これについては、すでに多くの研究がなされてきた。本稿では、先行研究を踏まえつつ、一九世紀ドイツにおけるルターの造形化を三つのパターンに分類して考察する。まず十九世紀のルター像の嚆矢となったヴィッテンベルクのルター記念碑(図1)とその建立過程を紹介した上で(第一節)、ルターの生涯の絵画化(第二節)、歴史上の偉人としてのルター(第三節)、宗教改革者としてのルター(第四節)に分けて検討していく。これによって、十九世紀ドイツにおけるルター・イメージの展開とその背景を明らかにする。

## 一 ヴェイテンベルクのルター記念碑

十八世紀末のドイツにおいて、ルターはどのような人物と見なされていたのか。哲学者のヘルダーは『人間性促進のための書簡』（一七九三年）に次のように書いている。

ルターは愛国的な偉人であった。ドイツ民族の教師として、いや、いまや啓蒙された全ヨーロッパの共同改革者として、彼はとうに認められている。

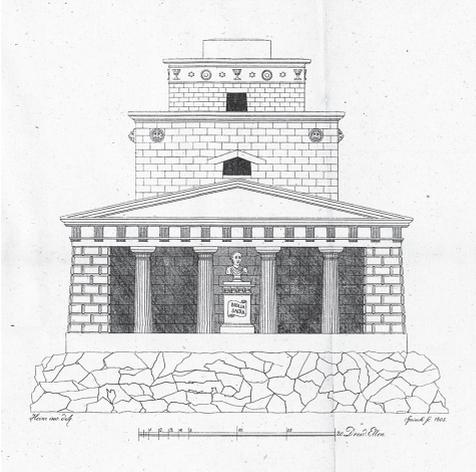


図2 ハイネによるルター記念碑案（背面図）、1805年、銅版画

こうした「愛国的な偉人」であるルターを称えようと、十九世紀に入ってルター記念碑の建立計画が立ち上がった。本節では、ルター・イメージを考察する出発点として、十九世紀初頭のルター記念碑建立計画について、先行研究を参照しつつ紹介する。

一八〇一年、ルターの生誕及び永眠の地であるアイスレーベンを含むマンスフェスト伯爵領の祖国文学協会によって、ルター記念碑の建造が提起された。これを受け、多くの画家や建築家たちによって記念碑案が制作された。一八〇五年に同協会が刊行した『マルティン・ルター博士記念碑あるいはそれについての構想、理念、提案』には九件十四枚の構想図が収められている。たとえばドレスデンの建築家ハイネ (Johann August Heine, 1769-1831) はドーリス式神殿を模した建造物を構想している (図2)。ベルリンの建築家ゲンツ (Heinrich Gentz, 1766-1811) の記念碑案は岩山にそびえるオベリスク型のモニユメントであった (図3)。また二〇代前半の駆け出しの建築家であったシンケル (Karl Friedrich Schinkel, 1781-1841) の記念碑案では、ゴシック教会風の建物の中に、小さな羽根をつけたルターの像が設置されていた。その他カトリックの匿名画家による記念碑案も含まれていた。後にバイエルン王国の宮廷建築家としてヴァルハラ神殿の設計に携わることになる若きクレンツェ (Leo von Klenze, 1784-1864) もルター記念碑を構想しており、円形の神殿建築の中に、古代の哲学者として表さ

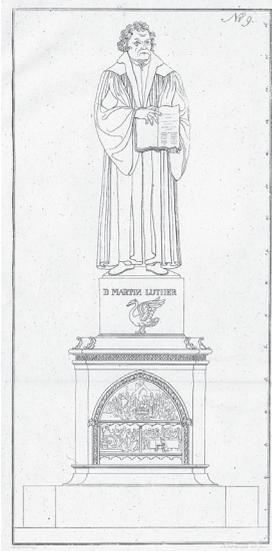


図4 シャドウによるルター記念碑案、1805年、銅版画

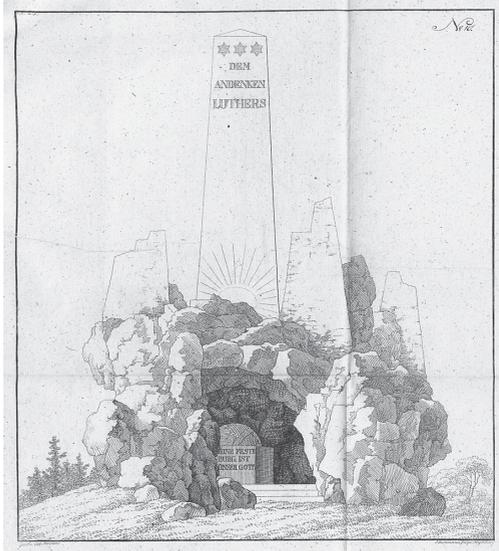


図3 ゲンツによるルター記念碑案、1805年、銅版画

れたルターの立像が置かれていた。<sup>5)</sup>

最終的に採用されたのは、彫刻家ヨーハン・ゴットフリード・シャドウ (Johann Gottfried Schadow, 1764-1850) の記念碑案(図4)であった。古代の哲学者でもなく、聖人でもない、一人の神学者として表されたルターの立像であった。本建立計画はしかし、フランスによるプロイセンの占領などにより立ち消えとなってしまった。一八一六年になって、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の命により、ルター記念碑の建造計画が再度持ち上がった。シッケルやゲーテ、シャドウらによって構想図が出されたものの、再びシャドウの案が再び採用され、ヴィッテンベルクの地に建立されることが決定された。こうして宗教改革三〇〇年の一八一七年に記念碑が着工され、四年後の一八二二年に除幕された。これを嚆矢にドイツ各地にルター像が建造されることとなった。同様の歴史的人の像として、ニュルンベルクのデューラー記念碑を挙げることができよう<sup>7)</sup>。

## 二 ルターの生涯の絵画化

十九世紀のドイツでは、ルターの生涯を主題とした版画や絵画が多数制作された。

初期の絵画作例に、画家ヨーハン・エルトマン・フンメル (Johann Erdmann Hummel, 1769-1852) の油彩画《マルテ



図5 フンメル《マルティン・ルター博士礼賛》1806年、  
油彩・カンヴァス、アンガー博物館

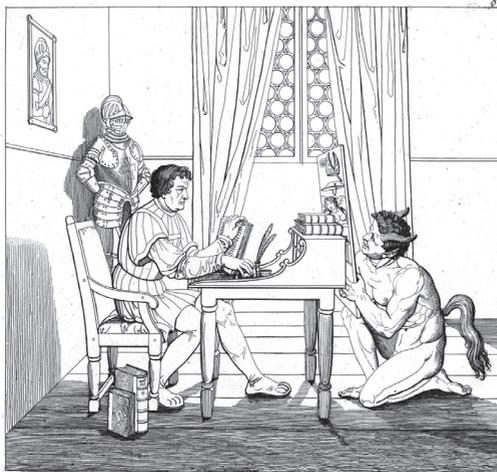


図6 フンメル《ヴァルトブルク城で聖書を翻訳するルター》1807年、銅版画

イン・ルター博士礼賛》(一八〇六年、アンガー博物館)(図5)がある。一八〇六年のベルリン・アカデミー展に出品された本作品では、縦五十三センチ、横五十四センチで上辺がアーチ状の本画面に、慈悲の女神らを前に両手を合わせるルターの姿が描かれている。額縁は上部を除く三辺が十三の画面に分けられており、左右の下隅を除く十一枚の画面は、左上から時計まわりに、生誕から臨終までのルターの生涯を描き出している。翌一八〇七年には本画面と額縁のルター伝が銅版画集として刊

行された(図6)。

十九世紀の前半には、ルターの伝記のための挿絵が数多く描かれた。広く流布したものの一つにヴェイルヘルム・フォン・ローベンシュテルン(Wilhelm von Löwenstern)によるリトグラフがある。『ルターとその改革』(一八三〇年)の挿絵として刊行された十五枚からなるリトグラフ集は、ガウンを羽織ったルターの立像から始まり、アイゼナハの聖歌隊の一員としてのルター、落雷に合うルター、宗教改革の始まり、ヴォルムス帝國議会のルター、ヴァルトブルク城のルター、教勅と教会法を焼き捨てるルター、父親としてのルター、臨終のルター、ルターの葬送などが続き、皇帝カール五世がルターの墓を訪れる場面(図7)で幕を閉じる<sup>10</sup>。なおアドルフ・メンツェル(Adolf Menzel, 1815-1905)が画業初期に手掛けた『ル

初期に手掛けた『ル



図7 レーベンシュテルン《ヴィッテンベルクのルターの墓を訪れる皇帝カール5世 1547年》[1830年]、リトグラフ

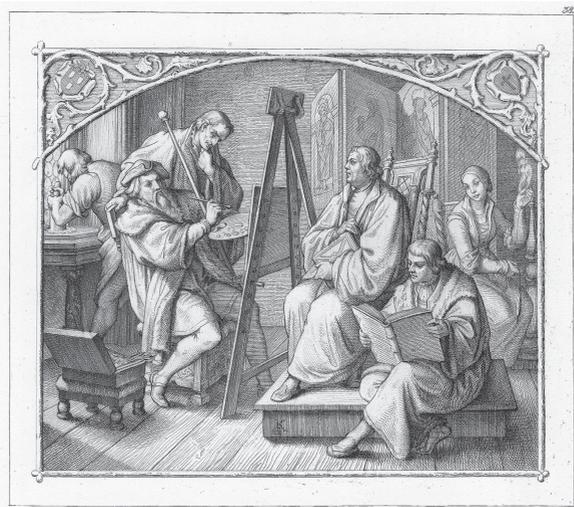


図8 ケーニヒ《ルーカス・クラーナハに肖像画を描いてもらうルター》1851年、エッチング

ターの生涯…少年たちのための絵本」(初版、一八三一年—二年頃)の挿絵の一部ではレーベンシュテルンの挿絵が手本にされたと考えられている<sup>11)</sup>。コーブルク生まれの画家グスタフ・ケーニヒ (Gustav König, 1808-1869) もまた、ルターを主題とした版画挿絵でよく知られた画家の一人であった<sup>12)</sup>。「マルティン・ルター博士 ドイツの宗教改革者」(一八五一年)の

前半では、生涯から埋葬までのルターの生涯が、ケーニヒによる四八枚の挿絵(図8)と共に紹介されている<sup>13)</sup>。その他、カール・アウグスト・シュヴェルトゲブルト (Carl August Schwerdtgeburth, 1785-1878) もルターの生涯を描いたことで知られる<sup>14)</sup>。

十九世紀半ばになると、ルター伝の一場面を主題とした単

独の油彩画が多く描かれるようになる。《フス派の説教》(一八三六年、ベルリン旧国立美術館)などを描いていた画家カール・フリードリヒ・レッシング (Carl Friedrich Lessing, 1808-1880) は一八四八年頃からルターを主題とした作品に取り組んでいる。《教勅を焼き捨てるマルティン・ルター》、1520年》(一八五二年、



図9 レッシング《教勅を焼き捨てるマルティン・ルター、1520年》  
下絵素描、1851年、所在不明



図10 シュパンゲンベルク《家族の中のルター》1866年、油彩・カン  
ヴァス、ライプツィヒ造形美術館

所在不明)や《ルターとエックの討論》(一八六七年、カールスルーエ、州立美術館)などの油彩画を制作しており、下絵素描(図9)や他の画家による模写も知られている<sup>15)</sup>。その他、父親としてのルターを描いたグスタフ・アドルフ・シュパンゲンベルク(Gustav Adolph Spangenberg, 1828-1891)の油彩画

《家族の中のルター》(一八六六年、ライプツィヒ造形美術館)(図10)やフーゴー・フォーゲル(Hugo Vogel, 1855-1934)の油彩画《ヴァルトブルクで説教するルター》(一八八二年、ハンブルク美術館)などがある<sup>16)</sup>。

ルター伝は一八七〇年代になると絵画連作としても描かれるようになる。ザクセン・

ヴァイマル・アイゼナハ大公のカール・アレクサンダーが、ヴァルトブルク城の「宗教改革の部屋」と呼ばれる三つの部屋の室内装飾として、大公国の美術学校の教員であった四人の画家に計十八枚の絵画を描かせた<sup>17)</sup>。第一室のための七枚の油彩画はベルギー出身でカトリックの画家フェルディナン・パウウェルス(Ferdinand Pauwels, 1830-1904)に委ねられて一八七〇年頃から七二年にかけて制作され(図11)、

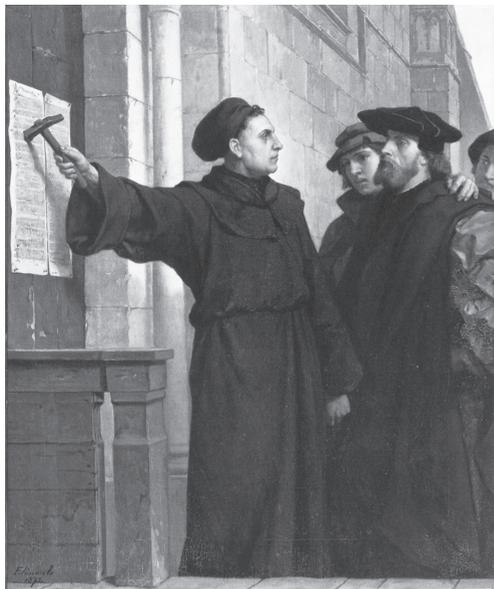


図11 パウウェルス《ルターの提題掲示》1872年、油彩・カンヴァス、ヴァルトブルク城

第二室の五枚の油彩画はパウル・トゥマン(Paul Thumann, 1834-1908)によって一八七二―七三年に描かれた。第三室の六枚の絵画はベルギー生まれのウイレム・リンニヒ(子)(Willem Linnig, 1842-1890)とアレクサンドル・シユトルイヌ(Alexandre Struys, 1852-1941)によって一八八〇―一八八二年に制作された。その他、ルターの生涯を描いた絵画連作として、エアフルト市庁舎内のエドゥアルト・ケンプファー(Eduard Kämpfer, 1859-1926)による《ルターの生涯》(一八八九―一

八九五年頃、七枚組)などが挙げられる<sup>18)</sup>。

以上のように、十九世紀前半にはレーベンシユテルンやケーニヒラによるルター伝の挿絵が広く流布していたが、十九世紀後半になると、ヴァルトブルク城の絵画連作に代表されるように、ルターの生涯を主題とした多くの油彩画が描かれるようになった。

### 三 歴史上の偉人としてのルター

哲学者のヘーゲルは『歴史哲学講義』(一八四〇年)の中でルターについて次のように書いている。

ルターのおこなった聖書のドイツ語訳は、ドイツ国民にとつてはかりしれぬ価値をもつものでした。ドイツ語訳聖書は、カトリック世界のほかのどの国民にもない、国民の書となりました<sup>19)</sup>。

十九世紀になって歴史に対する認識が高まると、ルターはドイツや世界の偉人の一人として造形化されるようになっていく。最初に取り上げるのは、ヴァルハラ神殿のルター像(一八三一―一三三年)(図12)である<sup>20)</sup>。バイエルン王国のヴァルハラ神殿には、ドイツの偉人たちの胸像が、ルートヴィヒ一世の座像も含め、今日では一三〇点ほど収められている。ルター像は

ドレスデンの彫刻家エルンスト・リーチェル(Ernst Ritschel, 1804-1861)によって制作された<sup>21)</sup>。リーチェルは一八三一年にルートヴィヒ一世より依頼を受け、一八三三年には納品したものの、ルターの胸像は一八四二年のヴァルハラ神殿落成時には設置されず、ようやく一八四七年になって今日の場所に置かれた。ここにカトリック国であったバイエルン王国における、ルターに対する見解の変化を読み取ることもできよう。

ルターの姿は、ベルリン旧国立美術館内のオットー・ガイヤー(Otto Geyer, 1843-1914)によるフリーズ(一八七〇―五年)にも見出される<sup>22)</sup>。一階から二階に続く階段の間に設置さ



図12 リーチェル《マルティン・ルター博士》1831-33年、大理石、ヴァルハラ神殿

れた、四壁合わせて三十五・二メートルの、石膏とアラバスターによるフリーズには、古代のアルミニウス(ヘルマン)から十九世紀にいたるまでのドイツの偉人たち(政治家、文学者、科学者、哲学者、音楽家、芸術家など)が、左から右に向かって、基本的に年代順に表されている。ルターは第二壁面の中央部分に、聖書を持った立像として登場する(図13)。ルターの左右にはメランヒトンとヘッセン方伯フィリップ度量侯が描かれ、ザクセン選帝侯フリードリヒ賢明公やヨーハン・フリードリヒ、画家のクラナハなどの姿も見えている。

ルターや宗教改革は、世界史を主題とする歴史画連作のテーマとしても好んで取り上げられた。ヴェイルヘルム・フォン・カウルバッツハ(Wilhelm von Kaubach, 1804/5-1874)は、ベルリン新博物館の階段の間に、人類の全文化的発展をテーマとしたフレスコ画連作(一八四七―六五年、現存せず)を制作している<sup>23)</sup>。《宗教改革の時代》(一八六四年、現存せず)(図14)は、メイン画面六



図13 ガイヤー《ベルリン旧国立美術館「階段の間」フリーズ》(第二壁面部分)、1870-75年、石膏・アラバスター

メとしても好んで取り上げられた。ヴェイルヘルム・フォン・カウルバッツハ(Wilhelm von Kaubach, 1804/5-1874)は、ベルリン新博物館の階段の間に、人類の全文化的発展をテーマとしたフレスコ画連作(一八四七―六五年、現存せず)を制作している<sup>23)</sup>。《宗教改革の時代》(一八六四年、現存せず)(図14)は、メイン画面六



図14 カウルバッハ《宗教改革の時代》1864年、フレスコ、現存せず

枚のうちの最後の一枚で、ゴシック教会を舞台に、十二世紀から十七世紀に活躍した歴史上の人物一〇六名を描き出している。

これらの人物はおおよそ三角の構図上に配置されており、頂点にあたる部分に、聖書を高く頭上に掲げるルターが描かれている。ルターは、左右に描かれたカルヴァンとツヴィングリ、ユストゥス・ヨナスとブーゲンハーゲンと共に、半円形の構図を作り出している。画面にはコロンブス、エラスムス、ペトラルカ、コペルニクス、デューラーらの姿も見出される。

今日バイエルン州議会として使用されているマクシミリアヌムの「歴史画ギャラリー」でもルターの生涯の一場面を描いた絵画を見ることができる。ユリウス・シュノル・フォン・カロルスフェルト (Julius Schnorr von Carolsfeld, 1794-1872) の《ヴォルムス帝国議会のルター》(一八六九年)である<sup>24</sup>。バイエルン国王マクシミリアン二世は一八五七年に完成したアテナウム、後のマクシミリアネウムの室内装飾として、アダムとイブの原罪から諸国民の戦いにいたる、世界史などを題材とした三十枚の油彩画を複数の画家たちに制作させた。今日現存する十七枚のうち一枚である《ヴォルムス帝国議会のルター》には、カール五世らを前に自説を述べるルターの姿が描き出されており、本作品の下絵素描も残されている。

ベルリンで活躍した画家アントン・フォン・ヴェルナー (Anton von Werner, 1843-1915) もルターを描いたことで知られている。油彩画《ヴォルムスの帝国議会のルター》(一八七七年)は、ヴェルナーが一八七〇年に手掛けたキールの *Geliehenschule* の講堂壁画 (現存せず) のレプリカとして制

作されたものである<sup>25</sup>。またデュッセルドルフの画家ペーター・ヤンセン (Peter Janssen, 1844-1908) の《会谈へ向かう宗教改革者たちを迎えるフィリップ度量侯、一五二九年》(一九〇三年) は、マールブルク大学の大讲堂に描かれた、同地の歴史をテーマとした七枚組の絵画連作(一八九五—一九〇三年)の一枚である<sup>26</sup>。マールブルク会谈に際し、民衆たちが見守る中、フィリップ度量侯らが、ルターやメラnhitonらを迎える場面が描かれている。

このように、十九世紀のドイツにおいて、ルターは歴史上の偉人の一人として造形化され、ルターや宗教改革の物語は、十九世紀に数多く制作された歴史画の主題にも選ばれた。

#### 四 宗教改革者としてのルター

ドイツではプロイセン王国を中心に統一が進められ、一八七一年にドイツ帝国が誕生する。このドイツ統一の宗教的な土台となったのがプロテスタントイイズムだった<sup>27</sup>。ベルリン大学の教会史の教授であったアドルフ・フォン・ハルナックは『教理史教本』第三卷(一八九〇年)に以下のように書いている。

たしかに、福音主義のキリスト教は人類に贈られたものであり、また一方ドイツ精神はこんにちもなおプロテスタントイイズムに帰服してはいない。それにもかかわらずプロテ

スタントイイズムとドイツ国民性は離れがたく結びついている。宗教改革は十六世紀においてドイツ帝国を救ったが、いまでもやはりそれはドイツ帝国の最強の力であり、効果を及ぼし続ける原理であり、最高の目的なのである<sup>28</sup>。

十九世紀の後半になると、こうした政治的・宗教的状况を背景に、ルターは宗教改革者として造形化されるようになる。絵画の作例としては、前述のカウルバッハ《宗教改革の時代》(図14)やヤンセン《会谈へ向かう宗教改革者たちを迎えるフィリップ度量侯、一五二九年》などを挙げることができるが、本節では彫刻や記念碑の大型作例を取り上げる。

フランクフルト・アム・マインから南西に六十キロほどに位置するヴォルムスは、一五二二年に帝国議会が開催された地であるが、この街の中心部に《宗教改革記念碑》(一八六八年、図15)がある。この大型の記念碑はエルンスト・リーチエルによって設計され、一八六一年のリーチエル没後は弟子たちの手によって完成された<sup>29</sup>。十二・五メートル四方の御影石の土台の上に、ルター像を中心に計十二体のブロンズ彫刻が設置されている。ルター像は高さ三三〇センチで、ブロンズ・閃長岩の台座も合わせると五メートルに及び、外衣を身に付けた立像で、左腕で抱えた聖書の上に右手のこぶしを載せている。台座の下部には、向かって右前方から時計回りに、ボヘミアのヤン・フス、イタリアのサボナローラ、フランスのピーター・ワルド、



図15 リーチェル他《宗教改革記念碑》1868年、ヴォルムス



図16 『Illustrierte Zeitung』マルティン・ルター生誕400年記念号、1883年

イギリスのウィクリフと、各国で宗教改革以前に活動した人物の座像が置かれている。記念碑の四隅には、ザクセン選帝侯フリードリヒ三世（賢明公）（左前方）とヘッセン方伯フィリップ度量侯（右前方）、ヨハネス・ロイヒリン（左後方）とフィリップ・メランヒトン（右後方）の立像が配置されている。

《宗教改革記念碑》のルター像は、その後のルター・イメージとして流布していった。一八八三年の『Illustrierte Zeitung』（絵入り新聞）「ルター生誕四〇〇年記念号」の表紙には、ヴォルムスのルター像が掲載されている（図16）<sup>30</sup>。雑誌『Kladderatsch』（二十八卷三十七・三十八号、一八七五年八月十五日付）に掲載された「ヘルマン記念碑献像祭のために」



図17 プファンシュミット《ルター》、1905年頃、ベルリン大聖堂



図18 ゲッツ《ヴォルムス帝国議会における修道士としてのルター》1904-5年頃、ブロンズ、ベルリン大聖堂



図19 ヤーネンシュ《聖書を翻訳するルター》1904-5年頃、ブロンズ、ベルリン大聖堂

では、トイトブルクの森でローマ軍を破ったヘルマン（アルミニウス）の記念碑とヴォルムスのルター像が並置されている<sup>31</sup>。ドイツ帝国とプロテスタントイイズムのつながりは、ベルリン大聖堂にも見ることができ<sup>32</sup>。プロイセン王やドイツ皇帝を輩出したホーヘンツォレルン家の墓所であるベルリン大聖堂は皇帝ヴィルヘルム二世の命によって一九〇五年に改築された。聖堂内では、装飾された八本の柱の上に、宗教改革者と彼らを支持した君主たちの立像が置かれている。主祭壇を挟んで立つ四本の柱上は、北側から南側に向かって、ツヴィングリ、ルター（図17）、メラニヒトン、カルヴァンの立像で装飾されている。聖堂後方の四本の柱上には、北側から南側に向かって、ヘ

ッセン方伯フィリップ度量侯、フリードリヒ賢明公、ブランデンブルク選帝侯ヨハヒム二世、初代プロイセン公アルブレヒトの立像が置かれている。また聖堂の西正面の左右には、ルターをテーマにした二枚のブロンズ・レリーフが設置されている。《ヴォルムス帝国議会における修道士としてのルター》（ヨハネス・ゲッツ (Johannes Götz, 1865-1934) による) (図18)、《聖書を翻訳するルター》（ゲルハルト・ヤーネンシュ (Gerhard Janssch, 1860-1933) による) (図19) である。これらの主題は、神聖ローマ帝国との対立やドイツ語聖書の翻訳という、いわばドイツ的なテーマであったと言える。このように、十九世紀後半には、政治的・宗教的状況に後押

しされ、ルターを宗教改革者たちと共に表した、大型の記念碑や聖堂装飾が制作された。

### おわりに

本稿では、十九世紀におけるルターのイメージについて、ルターの生涯、歴史上の偉人としてのルター、宗教改革者としてのルターに分類して考察してきた。すでに一八〇一年にはルター記念碑の建立計画が立てられており、十九世紀前半にはレーベンシュテルンやグスタフ・ケーニヒなどによるルター伝の挿絵がルターのイメージとして流布していた。その後、一八四七年にはヴァルハラ神殿にルター像が設置され、一八四八年にレッシングがルターを描き始めるなど、三月革命の前後よりルターに対する関心が高まっつていき、一八六〇年代から八〇年頃にかけて、ルターを主題とした多くの油彩画が制作された。ルター伝の中では「教勅を焼き捨てるルター」「ヴォルムス帝国議会のルター」、「ドイツ語聖書を翻訳するルター」など、ローマ・カトリック教会との対立やドイツ性を示す主題が好んで取り上げられている。ドイツではプロイセンを中心にドイツ統一が進められ、一八七一年にドイツ帝国が成立すると、カトリックに対する文化闘争も行われた。こうした過程でプロテスタントイズムとナショナリズムの結びつきが強まり、宗教改革者としてのルターが造形化されていった。

二十世紀に入ってから、たとえばローヴィス・コリンツ(Louis Corinth, 1858-1925)やエルンスト・バルラッハ(Ernst Barlach, 1870-1938)といった画家たちがルターを描いている<sup>33</sup>。一九一七年に宗教改革四〇〇年を迎え、ナチスが政権を握った一九三三年は、奇しくもルター生誕四五〇周年であった。第二次世界大戦後は一時下火になるものの、ルターのイメージは、一九八三年のルター生誕五〇〇年、そして一昨年(二〇一七年)の宗教改革五〇〇年などに再生産され、今日まで継承されている<sup>34</sup>。

### 註

1 ルターを主題とした十九世紀の版画や絵画については以下に詳しい。Ausst.-Kat.: *Luthers Leben in Illustrationen des 18. und 19. Jahrhunderts*, Coburg: Kunstsammlungen der Veste Coburg, 1980; Holsing, Henrike: *Luther: Gottesmann und Nationalheld. Sein Image in der Deutschen Historienmalerei des 19. Jahrhunderts*, Köln: Diss., Universität zu Köln, 2004. 十九世紀以降に建立されたルター及び宗教改革者の記念碑については以下に詳しい。Weber, Wilhelm: *Luther-Denkmal. Frühe Projekte und Verwirklichungen*. In: *Denkmäler im 19. Jahrhundert. Deutung und Kritik*, Hrsg. von Hans-Ernst Mittag und Volker Plagemann (Studien zur Kunst

des 19. Jahrhunderts. Bd. 20), München: Prestel, 1972, S. 183-215. Kammer, Otto: Reformationsdenkmäler des 19. und 20. Jahrhunderts. Eine Bestandsaufnahme. Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2004. ルターや宗教改革やホーネンホッフの硬貨やメダルについては以下を参照のよう。  
Frese, Inge; Datow, Joachim: Martin Luther und seine Zeit auf Münzen und Medaillen. Schwezingen: K. F. Schimper, 1983; Ausst.-Kat.: Reformatio in Nummis. Luther und die Reformation auf Münzen und Medaillen. Eisenach: Wartburg, 2014.

- 2) Herder, Johann Gottfried: Herders Sämtliche Werke. Bd. 17. Hrsg. von Bernhard Suphan. Berlin: Weidmann, 1881, S. 87. 日本語訳はアンソニー・ボレンカト(谷口茂徳)『ヘーデルの精神史のルター』聖文舎、一九七八年、二六九頁一部改。ルターは一七九二年には「ルター・ヘーデル国民の教師」と題された論文にも着手していた。

- 3) それに関する研究として以下のものがある。Weber, a.a.O.; Ders.: Martin Luther im Spiegel der Kunst des 19. und 20. Jahrhunderts. In: *Eberburg-Hefte* 21 (1987), S. 153(33)-190(70); Steffens, Martin: „Dem wahrhaft großen Dr. Martin Luther ein Ehrendenkmal zu errichten“ — Zwei Denkmalprojekte im Mansfelder Land (1801-1821 und 1869-1883). In: *Preussische Lutherverehrung im Mansfelder Land*. Hrsg. von Rosemarie Knappe, Martin Treu und Martin Steffens, 2002, S. 113-184.

- 4) Königlich Preussische vaterländisch-literarische Gesellschaft der Grafschaft Mansfeld: Dr. Martin Luthers

Denkmal oder Entwürfe, Ideen und Vorschläge zu demselben mit vielen Kupfertafeln. Eisleben: Verdion, 1805.

- 5) アンソントの記念碑案については以下を参照のよう。  
Leopold: Entwurf zu einem Denkmale für Dr. Martin Luther. Braunschweig: Friedrich Vieweg, 1805; Ausst.-Kat.: Leo von Klenze. Architekt zwischen Kunst und Hof 1784-1864. München: Architekturmuseum der TU München und Münchner Stadtmuseum, 2000, S. 206-209, Nr. 9; Butlar, Adrian von: Leo von Klenze. Leben, Werk, Vision. 2. Aufl., München: C. H. Beck, 2014, S. 38-44.

- 6) シェーンのルター記念碑については以下を参照のよう。  
Mackowsky, Hans: Die Bildwerke Gottfried Schadows. Berlin: Deutscher Verein für Kunstwissenschaft, 1951, S. 243-246.

- 7) シェーラー記念碑については以下を参照のよう。大原まゆみ『ドイツの国民記念碑 一八一三年—一九一三年 解放戦争からドイツ帝国の終焉まで』(世界美術双書〇一〇) 東信堂、二〇〇三年、二十四—三十一頁。

- 8) 本作品については以下を詳しく。Ausst.-Kat.: „Die Kunst hat nie ein Mensch allein besessen“. Berlin: Akademie der Künste und Hochschule der Künste, 1996, S. 162-3, II. 2/113; Ausst.-Kat.: Luther und die Deutschen. Begleitband zur nationalen Sonderausstellung auf der Wartburg. Eisenach: Wartburg, 2017, S. 274-276, Nr. II. 107.

- 9) Hummel, Erdmann: Dr. Martin Luthers Verherrlichung.

- Auf 12 Blättern, erfunden und gestochen von Erdmann Hummel. [s. 1.] 1807.
- 10 Löwenstern, Wilhelm von: Luther und dessen Reformation. Mit 15 Lithographirten Folio-Blättern. Stuttgart, 1830.
- 11 Bock, Elfried: Adolph Menzel. Verzeichnis seines graphischen Werkes. Catalogue of his Graphic Work. 2. Aufl., San Francisco: A. Wofsy, 1991, S. 39-43.
- 12 キーリヨビゴシツチタケナヒ詳シク。Ehhard, August: Gustav König. Sein Leben und seine Kunst. Erlangen: Andreas Deichert, 1871.
- 13 König, Gustav; Gelzer, Heinrich: Dr. Martin Luther. Der Deutsche Reformator. Hamburg: Besser, Gotha: Perthes, 1851.
- 14 シュヴェルトナゲブルナヒゴシツチは以下を参照のル。Ausst-Kat.: Luthers Leben in Illustrationen des 18. und 19. Jahrhunderts, a.a.O., S. 166-171, Nr. 60; Kruse, Joachim: Drei graphische Folgen von Lutherslebenbildern des 19. Jahrhunderts. In: *Er fühlt der Zeiten ungeliebten Bruch und fest umklammert er sein Bibelbuch...* "Zum Lutherkult im 19. Jahrhundert. Hrg. von Hardy Eidam und Gerhard Seib, 1996, S. 40-53.
- 15 ヲレらの作品ゴシツチは以下を詳シク。Jenderko-Sichelschmidt, Ingrid: Die Historienbilder Carl Friedrich Lessings. Köln: Universität zu Köln, Diss., 1973, S. 120-165, Nr. 7-8; Leuschner, Vera: Carl Friedrich Lessing 1808-1880: Die Handzeichnungen. 1. Teilband. Köln und Wien: Böhlau, 1982. Zugl.: Göttingen, Univ, Diss., 1978, S. 203-223.
- 16 フォーケルの作品ゴシツチは以下を参照のル。Ausst-Kat.: Luther und die Folgen für die Kunst. Hamburg: Hamburger Kunsthalle, 1983, S. 516-7, Nr. 390.
- 17 ヲレらの作品ゴシツチは以下に詳シク。Ausst-Kat.: Luthers Bilderbiografie. Die einstigen Reformationszimmer der Wartburg. Eisenach: Wartburg; Eisleben: Luthers Studienhaus, 2012. ヴァルトブルク城は一八一七年十月十八日に学生団体ブルシェンシャフトによつて「宗教改革三〇〇年とライプツィヒの戦ひ四周年を祝う「ヴァルトブルク祭」が開催された。カール・アレクサンダーは一八三八年よりヴァルトブルク城を中世の城として再建・修復した。城内の「方伯の部屋」「歌人の間」「エリーザベトギャラリー」には画家メウヴェメント (Moritz von Schwind, 1804-1871) によつてフレスコ画が制作された。これにゴシツチは以下を参照に詳シク。Schall, Petra: Moritz von Schwind und die Wartburg: Bilder eines Spätromantikers. Regensburg: Schnell & Steiner, 2018.
- 18 ヲレらゴシツチは以下を参照のル。Fischer, Bodo. Die Gemälde im Erfurter Rathaus. Erfurt: Verl.-Haus Thüringen, 1991, S. 20-22, 70-79.
- 19 ヘーゲル (長谷川宏訳) 『歴史哲学講義』(下) 岩波文庫、一九九四年、三二七頁。
- 20 ヴァルトラ神殿にゴシツチはTraeger, Jörg. Der Weg nach Walhalla: Denkmalandschaft und Bildungsreise im 19. Jahrhundert. 2. erw. Aufl. Regensburg: Bernhard Bosse, 1991 の他、大原前掲書、三十三-四十五頁を参照のル。

- ターの胸像については以下に詳しう。Quaetisch, Christian: Walhalla. Amtlicher Führer. München: Bayerische Schlösserverwaltung, 2017, S. 96-97, 136.
- 21 リーチャルの代表作としてヴァンモールのゲーテ・シラー記念碑やヴォルムスの《宗教改革記念碑》がある。詳しくは以下を参照のほう。Ausst.-Kat.: Ernst Rietschel 1804-1861. Zum 200. Geburtstag des Bildhauers. Dresden: Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Skulpturensammlung, 2004.
- 22 本作品については以下に詳しう。Wullen, Moritz: Die Deutschen sind im Treppenhaus. Der Fries Otto Geyers in der alten Nationalgalerie. Köln: Dumont, 2001; 三井麻央「オットー・ガイヤーによるベルリン旧ナショナル・ギャラリーのフリースに関する考察」(第六十八回全国大会研究発表要旨)『美術史』第六十五巻(第一八〇号)、二〇一六年、二一〇—一頁。
- 23 本作品については以下に詳しう。Schasler, Max: Die Wandgemälde Wilhelm von Kaubachs im Treppenhaus des Neuen Museums zu Berlin. Berlin: Allgemeine Deutsche Verlags-Anstalt, 1854; Menke-Schwinghamer, Anemarie: Weltgeschichte als Nationalepos, Wilhelm von Kaubachs Kulturhistorischer Zyklus im Treppenhaus des Neuen Museums in Berlin. Berlin: Deutscher Verlag für Kunstwissenschaft, 1994.
- 24 本作品については以下を参照のほう。Teichmann, Michael: Julius Schnorr von Carolsfeld (1794-1872) und seine Ölgemälde. Monographie und Werkverzeichnis. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2001, S. 189-197, 312-313, Nr. 33.
- 25 本作品については以下を参照のほう。Ausst.-Kat.: Anton von Werner. Geschichte in Bildern. Berlin: Deutsches Historisches Museum, 1993, S. 232-240.
- 26 本作品については以下を参照のほう。Lemberg, Margret; Oberlik, Gerhard: Die Wandgemälde von Peter Janssen in der Alten Aula der Philipps-Universität zu Marburg. Marburg: N.G. Elwert, 1985.
- 27 近代ドイツにおけるプロテスタントイデオロギナリズムの結びつきについては以下でわかりやすく説明されている。深井智朗『プロテスタントイデオリズム』中公新書、二〇一七年、一二五—一六五頁。
- 28 Harnack, Adolf: Lehrbuch der Dogmengeschichte (Sammlung Theologischer Lehrbücher). Bd. 3, Freiburg i. B.: Mohr, 1890, S. 693. 日本語訳はホルンカム(谷口茂訳)前掲書、三八三—四頁一部改。
- 29 本作品については以下に詳しう。Theiselmann, Christiane: Das Womser Lutherdenkmal Ernst Rietschels (1856-1868) im Rahmen der Lutherrezeption des 19. Jahrhunderts. Frankfurt am Main u.a.: Peter Lang, 1992. Zugl.: Münster (Westf.) Univ., Diss., 1991.
- 30 Martin Luther. Zum 400jährigen Geburtstag Martin Luthers (Festnummer der *Illustrierte Zeitung*). Leipzig: J. J. Weber, 1883.
- 31 Zur Enthüllungsfest des Hermanns-Denkmal am 16. August 1875. In: *Kladderadatsch*. Nr. 37 und 38 vom 15. 8. 1875; Ausst.-Kat.: Luther. 1917 bis heute. Lichtenau-Dalheim: Stiftung Kloster Dalheim. IWL-Landesmuseum für Klosterkultur, 2016-17, S. 160, Nr. 1. 40. ルーレン記念碑については大原前掲書、六

- 十三―七十六頁を参照のこと。
- 32 ヘルリン大聖堂内の装飾については以下を参照のこと。  
Eisenlöffel, Lars: *Der Berliner Dom*. Hsg. von der Oberpfarr- und Domkirche zu Berlin. Berlin: Deutscher Kunstverlag, 2013.
- 33 コリントは《ルター》(油彩テンペラ、所在不明)を一九一六年のヘルリン分離派展に出品した。Berend-Corinth, Charlotte: *Lovis Corinth. Die Gemälde. Werkverzeichnis*. München: Bruckmann, 1992, S. 152, Nr. 655. 一九二一年にはリトグラフ集《マルティン・ルター》を出版した。これについては以下を参照のこと。Ausst.-Kat.: *Martin Luther aus der Sicht von Lovis Corinth*. Göttingen: Altes Rathaus Göttingen, 1989. ハルラッソンのリトグラフ《悪魔世に満ちた》は雑誌『Kriegszeit: Künstlerflugblätter』46号(一九一五年七月一日付)に掲載されたものである。これについては以下を参照のこと。Laur, Elisabeth: *Ernst Barlach. Die Druckgraphik*. Leipzig: E. A. Seemann, 2001, S. 80, Nr. 20.
- 34 一九一七年から現在までのルター受容については以下に詳しく。Ausst.-Kat.: *Luther 1917 bis heute*, a. a. O..

図版出典

- 図1 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Statue\\_Marktplatz\\_\(Wittenberg\)\\_Martin\\_Luther\\_\(bearbeitet\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Statue_Marktplatz_(Wittenberg)_Martin_Luther_(bearbeitet).jpg)
- 図2―4 Königlich Preussische vaterländisch-literarische Gesellschaft der Gratschaft Mansfeld, a. a. O., Nr. 3.
- 図3 Ebd., Nr. 10.
- 図4 Ebd., Nr. 9.
- 図5 Ausst.-Kat.: „Die Kunst hat nie ein Mensch allein besessen“. a. a. O., S. 163, II. 2/113.
- 図6 Hummel, a. a. O., Nr. 8.
- 図7 Löwenstern, a. a. O., Nr. 15.
- 図8 König und Gelzer, a. a. O., Nr. 38.
- 図9 Pflugk-Harttung, Julius von: *Im Morgenrot der Reformation*. Stuttgart: Wilhelm Hergel, 1926, ohne Nr.
- 図10 Ausst.-Kat.: *Philipp Melancthon und Leipzig*. Beiträge und Katalog zur Ausstellung. Leipzig: Universität Leipzig, 1997, S. 94.
- 図11 Ausst.-Kat.: *Luthers Bildbiografie*, a. a. O., S. 88.
- 図12―15, 17―19 執筆者撮影
- 図14 Newiny, L. Wilhelm von Kaulbach. Bielefeld: Velhagen & Klasing, 1913, ohne Nr.
- 図16 Martin Luther. Zum 400jährigen Geburtstag Martin Luther's (Festnummer der Illustrierte Zeitung), a. a. O..